

INTERVIEW：インタビュー



ソフトボール女子日本代表監督

宇津木 麗華さん

インタビュー場所は、JR 高崎駅から路線バスで30分の「宇津木スタジアム」でした。1、2時間に1本しかない帰りのバスの時間を確かめ、「必ず1時間以内」と構えてインタビューを始めましたが、始まって5分で、もう諦めました。宇津木さんからは速射砲のごとく言葉があふれ出てきて、止まりません。なるほど、こうやって選手とコミュニケーションをとり、世界一の日本代表チームを作り上げたのかと感心しました。3年後のロサンゼルス五輪が楽しみです。

聞き手・構成：坂 仁根

—— 4年ごとに行われる女子ソフトボールの世界カップ。昨年7月にイタリアで行われた決勝ラウンドでは、日本は宿敵米国を破って優勝しました。しかし、決勝ラウンドの初戦では米国に2-0で完封負けしています。どうやってチームを立て直したのでしょうか。

日本は若い選手が中心のチームで、チャンスになったらもう硬くなって打てないなど、米国との初戦は、技術ではなく精神的なもので負けたと思いました。それで、試合後に活を入れました。

—— 何をしたのですか。

若い選手たちには、英語が分からないとか、どうしても米国に対するコンプレックスがあったと思うんです。対して米国チームは、どこへ行っても自分たちがナンバーワンだと思っていて、負けた私たちのそばを悠々と笑いながら引き上げていく。そこで、次に勝つのは私たちよということを見せつけようと、試合後もバッティング練習を続けました。ボール球を振らないこと、コンパクトにバットを振り切ることを念頭に、とにかく精神力を見せてやろうと、一人一人が100球ぐらい打ち込みました。すごく暑い中でやるこの練習に絶対意味があると伝えました。これで選手たちは、

やっぱり自分たちのプレーをやろうよと、気持ちを切り替えることができたのではないかと思います。

—— 決勝ラウンド2度目の対戦となった最終戦では、6-1で見事に米国を破りました。

米国は、初戦に日本を完封したピッチャーではなく、決勝ラウンド前の日米対抗戦で、日本を6回まで無安打に抑えた左腕を先発させました。米国は最終戦までこのピッチャーを温存していましたが、それまでの米国の監督の選手起用法からして、必ず最終戦に出てくる、というのが私たちの読みでした。それが当たり、低めに投げってくるピッチャーなので、低めに強いバッターをそろえ、打ち崩すことができました。

監督として大事なものは、戦略だと思っています。相手の出方によってこちらの戦略を変えていくのが私のやり方です。試合を重ねながら、我々は変化していくということを選手に伝えて、チャレンジするのではなく、とにかく日本の勝利を目指そうよと伝えています。

—— 2021年の東京五輪でも決勝で米国を破っていますね。

米国は打つ能力がすごく高いチームですが、こちら

が先に点を取れば、プレッシャーを感じてしまうチームでもあるんです。いかに米国から先取点を挙げるかが私たちの課題でしたが、東京五輪の決勝では、内野安打で先取点を取ることができ、勝利につながりました。課題にきっちり答えを出せば、結果はついてきます。

——若い選手はどのように育てるのですか。

指導者が連携して、グラウンドだけじゃなくて生活のマネジメントも全部やらないといけないと考えています。例えば上野（由岐子）みたいな選手は、自分で何もかもできるんですよ。でも若い選手って、ぴちぴちの若さですからもうすごく元気なのはいいんですけど、どうしても友達と遊んだりしたい。だけど、自分を抑えなければいけないときがあって、この大事な一戦をしっかりと考えようよと仕向けていくことが必要です。

根性じゃないけど、自分たちが絶対に勝ちますという精神力を出していかないと。ワンチームとして戦うことがすごく大事で、これは今しかできないよ、とか。

——3年後のロサンゼルス五輪に向けて、どういうチームを作りたいですか。

海外のグラウンドは大きくて、なかなかホームランは出にくい。そこで、守備を中心としながらも、戦略として足で相手を攻略するチーム作りを考えたいです。今の代表チームは外野手を始め内野手もみんな足が速いです。

——日本代表として選手を選抜する基準はあるのですか。

たとえばアジアの大会などでは、レベルがちょっとまだまだでも、将来的に上野と同じレベルに行くかもしれないというところがあれば、高校生のピッチャーも連れて行きます。でも、ワールドカップはやっぱり優勝しないといけないですから、若い選手を使うのはすごく難しい。

——日本代表ではどのように選手を強化するのですか。

若い選手を呼び寄せて技術とか精神的なものとかを全日本で強化しても、結局自分のチームではそれを使わないから、元のチームに戻ったら前のレベルに戻っちゃうんです。そこで、日本代表選手には、金メダルを取りにいかないといけないという私の考えを徹底的に伝えます。もし負けても君たちは堂々とソフトボールを続けていい、負けたら監督が責任を全部取って消えるから安心しなさい、だから3年間みんな頑張ろう、と言っています。

それと、若い選手だけでなく、やはり経験ある選手も必要です。もっとも、経験のある選手でもうまくいくとは限らない。私のソフトボールは結構サインプレーがあるんですが、所属するチームが違うので失敗も多い。なかには、所属チームで4番を打っているのに、監督からサインを出されたことがないという選手もいる。でも、私のチームでは、4番打者は4番目の打者でしかなくて、ゲームが始まったら4番打者も9番目や1番目になることがある。一流選手は全部1番という私の戦略でやってほしい、と伝えます。

——選手にはどのようなことを求めますか。

心技体、体技心で、やっぱり人間力を高めていかないといけないと思います。選手には、優勝スピーチの練習をさせます。私が題を作って、1分間でもいいからしゃべらせる。慣れてないですから、泣きながらしゃべる子もいる。でも私は、それは損するよ、金メダルを取ったのにしゃべれないというのは、いくらシャイでも良くないよと、会話のキャッチボールをしながら練習させます。

正直に言うと、私が一番苦手なのは日本語です。でも、しゃべらないといけないから、一番好きにならないといけない。レベルが高い人が聞けばお前の日本語は何なんだよと思うかもしれないけど、私にすれば一生懸命しゃべっている。だから、あなたも怖がる必要はない、私が見本です、と伝えます。最終的には、みんな私よりずっとしゃべれるようになってます。

—— 全日本の強化合宿などでも、そのように選手に話しかけるのですか。

練習のときも練習じゃないときも、話しかけます。朝起きて、その子の表情を見るんですね。何か悩みがあるのかなとか。その子の問いかけに対して何か答え、私も成長していく。

会話では、例えば「雨でびしょり」と言うべきところが私が「雨でびっくり」と日本語を間違えて、突っ込まれたりします。そういうやり取りを通して子どもたちはついてきます。「宇津木監督ってイメージがすごく怖いです」と言われて、「いや、もう一人の宇津木（妙子元監督）の方が怖いでしょ」と言ったりとか。

—— 選手との会話は日本女子ソフトボールの伝統なんですか。宇津木妙子元監督は、サウナでずっと選手たちと話し込んでいたそうですね。

私はサウナが嫌いなんですけど、一度納得がいかなかったことがあって、宇津木妙子元監督とサウナで議論したことがあります。しゃべっていて気付いたら、もうのぼせちゃって、倒れそうになりました。私は選手たちと散歩しながら話すことが多くて、2、3万歩も歩いて話し込むこともあります。それから部屋飲み。遠征先のホテルの私の部屋に集まって、ワインを飲みながらわあわあ話すんですけど、私は先に寝ちゃいます。

—— 宇津木妙子元監督とえば、1分間で100球とかのペースでやる速射砲ノックが有名でした。

そんな速いノックを、私はしないですね。たぶん性格が違う。選手時代、捕球しようと横に跳んだらまだ立ち上がってないのに向こう側にノックするんです。誰のペースでやってるのか聞いたら、「自分のペースだ」と言う。こちらも頭を使わないといけないから面白がって球を取ってましたけど、私はそういう練習はしません。

—— 2022年から始まったJDリーグ（ジャパン・ダイヤ

モンド・ソフトボールリーグ）についてお聞きしますが、それまでのリーグとの違いは何ですか。

ソフトボールは野球と違い、観客と選手の距離が近いです。例えば米国では、ベンチの中で選手がずっと歌を歌ったりしている。東南アジアでは、ベンチに太鼓を持ち込んで、打て打てとかリズムをとる。JDリーグでは、パフォーマンスやイベントでお客さんに楽しんでもらう。選手とファンの距離が縮まって、毎試合来るようなお客さんもいます。上野選手の髪形を真似したり、選手に誕生日プレゼントを持ってきたり。私の所属するビックカメラ高崎なんかは、来場するのは社員よりファンのお客さんの方が多いです。

—— さらにソフトボールを普及させるために、どういうことを考えてますか。

世界で勝たないとなかなかメディアで取り上げてもらえませんが、まずは勝つことです。それから、もう本当に子どもたちにあこがれてもらって、日本代表の上野みたいな選手になりたい、後藤（希友）みたいな選手になりたいというようになれば、もう本当に一番いいじゃないかなと思っています。

—— 日本代表の監督として一番苦労することは何ですか。

五輪では、日本代表を最終的には15名しか選べない。ちょっと残酷ですね。合宿のときは17名なんです。紙一重の差で2人が落ちてしまう。この2人になんて言ったらいいのかわからないです。

—— 宇津木さんは中国出身で、1988年に日本に来て、一番苦労したことは何ですか。

やはり最初は、日本語にすごく苦労しました。中国語と字は似ているんですけど、意味は違うことが多い。例えば日本語の「手紙」は、中国語では「トイレトペーパー」の意味になってしまいます。今でも、自分の考えを日本語でどうやって選手たちに伝えるか、結構難しく感じます。英語より難しいんじゃないでしょうか。

— 日本と中国とでは、コミュニケーションのとり方に違いはありますか。私のイメージでは、中国人の方が相手に積極的に話しかけてくる印象があるのですが。

何か話して、中国だったら、え、なんで私? ってなるところを、日本の選手たちは純粋に「はい」と答え、すごく素直に言うことを聞いてくれると思います。監督としてはやりやすいんですけど、嫌だったら嫌だとはっきり言いなさいと、先輩も交えたコミュニケーションを欠かさないようにはしています。例えば2人だけの席でお前、これをやれ、と言うといじめになってしまう。みんなで話していくことが大事です。

— 宇津木さんは選手として、シドニー五輪で銀メダル、アテネ五輪で銅メダルでした。一番思い出に残っていることは何ですか。

やはりシドニーの3試合連続ホームランじゃないでしょうか。アテネは正直に言うと貢献できず、何で銅メダルなんだと、すごく責任を感じました。でも、宇津木妙子監督を見て、自分がもし監督をやったらこういうふうにするんじゃないかと考えながら終わった大会でもありました。反省して、強化していく。

— 2008年の北京五輪では「上野の413球」などもあり、日本は念願の金メダルを獲得しました。

アテネ五輪の後、上野をさらに強化しようと米国に連れて行きました。最初は嫌がったんですけど、君が成長すれば日本のソフトボール界は20年苦労しない、と言って。たった4日間で、いろいろなボールを覚えました。そこが上野のすごいところなんです。北京五輪の決勝では、それまで五輪三連覇の米国と当たりました。本当に強いチームだったけど、連投にもかかわらず上野は決勝で投げるための練習をしてきていましたから、見事に完投勝利を挙げました。

— 北京五輪の後、上野選手は一種の燃え尽き症候群みたいになってしまった時期もあったのですよね。

はい。やれと強制するとかえってマイナスになって

しまうので、まずトレーニングコーチをさせました。選手にトレーニングを教えるためには、無理してでも自分が動かなくてはいけないですから。ピッチャーをしなくていいからバッターをやいな、とも言いました。そうしたらそのうち、やっぱり日本代表へ復帰したいと言ってきました。じゃあ、復帰戦は必ず勝たせるからと言って私も日本代表の監督になり、2012年の日本としては42年ぶりの世界選手権（現ワールドカップ）優勝につながりました。

今グラウンドに来る選手たちは、上野がこの年で頑張っているんだから私も頑張りたいという気持ちがあって、愛情とかお互いの協力があるから、やっぱり日本のソフトボールは強いんじゃないかなと思います。

— 指導者としてはどういうことを心がけていますか。

選手を大切に、大事にしていくというのが指導者の宿命じゃないかなと思います。選手は10人いればゲームができるけど、指導者は1万人、2万人が集まってもゲームはできない。そこを押さえないと。

私、本が好きなんです。スポーツの本は一切読まないんですけど、いろいろな経営者の本を読みます。一流の人はわずかで、一流の人間の考え方はたぶんほぼ似ているんですよ。だから、新聞も経済新聞。本を読むと、思考が膨らんできて、いろいろな発想が出てきます。この人の失敗の理由はこれか、こうすれば成功するかも、とか。ソフトボールしか考えてない自分ですけど、経済に思いを馳せるのは楽しいです。

— 今日はありがとうございました。

プロフィール うつぎ・れいか

1963年中国・北京市出身。やり投げから転向し14歳からソフトボールを始め、女子中国代表選手（内野手）として活躍。当時の女子日本代表監督・宇津木妙子さんと10年越しの交流後、実業団の招聘を受け25歳で来日、国内リーグ初優勝に貢献。日本リーグ三冠王達成の翌年1995年に帰化、シドニー2000五輪（銀）・アテネ2004五輪（銅）で日本代表の主砲として活躍した。女子日本代表監督としても、東京2020五輪・WBSC2023/2024で金メダルに導き、昨年11月、ロサンゼルス2028五輪女子日本代表監督に就任した。